

昭和五十年十月二一日 講演

「社会問題の見方」

こんばんは。ただいまご紹介にあずかりました関係でございます。この和敬塾のことは、私の隣に住んでおられる前川さんから（会場より笑）かねがね聞いておりました。非常に優秀な学生諸君が多数起居をともししておられるというのを聞いておりましたので、いちど拝見したいと思っていました。すけれども、今晚、その機会を与えられたことをたいへん喜んでおります。

私のお話しする題といたしましては、「社会問題の見方」という、まるで高等学校の社会科の試験問題のようなテーマを掲げておきましたけれども、私がお話し申しあげようと思っておりますことは、社会問題を見る場合に、どういつ「メガネ」をかけて見ればよいか、という問題でございます。自然現象の場合であれば、目がよい人であれば別に眼鏡を必要としないわけですけれども、社会現象というのは目の前にもつてきて、「こ

れがそうだ」というわけにはいかないのでございます。たとえば、「議会政治」というのはいったい何であるか、という場合に、国会の建物は永田町に行つて国会議事堂を見ればわかるわけですけれども、議会政治が何であるかというのは、建物だけ見ていても、あるいは議員さんの顔だけを見ていても少しもわからない。やはりその意味を理解するのでないと、議会政治を理解したことはならない。今日、日本はいわゆる「情報化社会」といわれておりますように、われわれは日夜、いろいろな社会問題に関する情報を、新聞、テレビ、あるいはラジオを通じて与えられているわけです。けれども、こういう社会問題に関する情報といひますのは、社会に起こったことがすべてわれわれに情報として与えられているわけではないのであつて、やはり情報を提供する人、新聞記者なりテレビの解説者なりが、一定の「メ

東京都立大学名誉教授 関嘉彦先生

ガネ」をかけて取捨選択をしている。そして、その人が一定の解釈のもとに事件の脈絡をつけてわれわれに提供しているわけです。したがつて、もしそういう情報を提供する人のかけているところの「メガネ」が、度が狂つていたり、あるいは色がついたりしておりますと、われわれに与えられるところの情報も、色がついた情報である、あるいは一面的な情報である、ということになりかねないわけでありませう。戦後、日本の新聞が自由になりました、われわれに与えられている情報というのは、大筋においてはそれほど大きな間違いはしてないと思ひますけれども、時としますと、どうもわれわれの常識から考えておかしいじゃないかと思ふような情報が与えられることが少なくない。それはやはり、情報提供者がかけている「メガネ」に狂いがあるのではないか、ということを考えております。そういう社会

問題に関する情報を、どういつ「メガネ」をかけて判断すればその意味をよく理解できるか、そのことを今晚お話し申しあげようと思っっている次第です。

ご紹介にありましたように、私は今から四、五年ほど前まで東京都立大学で教鞭をとっておりまして、最後は学部長をやっております。時あたかも、いわゆる大学紛争華やかかなりし頃でして、都立大学もご多分に漏れず紛争に巻き込まれたわけでありま。学部長という職掌柄、しばしば学生諸君との「大衆団交」と呼ばれていた団体交渉に出席したことがございますけれども、そういう団体交渉の席で学生諸君のほうから決まって出してくる質問があるわけでございます。それは、「本論に入る前に、まず確認しておきたいことがある。それは、いったい先生は体制側なのか反体制側なのか、それをまずはずきりさせておきましょう」というものです。どうも学生諸君の戦略、あるいは戦術は、先生のほうに、「反体制側である」ということをいわせておいて、「反体制側であるならば、われわれ学生も反体制側であり、われわれと同じ立場であるから、われわれの要求を呑むはずである」、どうもそういう作戦ではないかと思うんです。私はそう

いう場合に、「俺は体制側だ。日本は民主主義の憲法をもっている民主主義体制の国であり、俺は民主主義を守るほうであるから体制側である」と言っつてやりますと、学生諸君はキョトンとした顔をしまして、「先生は何もわかっていないんだなあ。体制・反体制というのは、現在の日本は資本主義体制の国であつて、その資本主義に賛成するほうなのか、あるいは資本主義に反対して社会主義を支持するほうなのかと、そういう意味で聞いているのだ」。そういうようなことを言いますから、私のほうから、「しかし君、資本主義、社会主義というのは、経済の組織に関する問題ではないか。経済の組織だけで社会体制全体を決める見方をいったい誰に習ってきたんだ」と逆に質問しますと、学生のほうは決まってマルクス(註一)の名前を持ちだしてくるわけです。こういった学生諸君のほうは、いうまでもなく、「資本主義は悪くして、資本主義に反対する社会主義のほうがよいんだ」という考え方で、体制側か反体制側か、あるいは資本主義か社会主義かということを知っているわけでありますけれども、こういうふうな見方、つまり、社会体制を見る場合に、資本主義であるか社会主義であるかというように見る「メガ

ネ」が日本では案外広く、学生側とは逆の立場であると考えられる人たちの間でも少なくないように私は思います。

これも私事になりますけれども、今からかれこれ二十年近く前になりますが、私の長女が高等学校に入學したとたんに、やれ資本主義がどうの、社会主義がどうのと、えらくむずかしいことを言いだした。高等学校に入ったばかりでそんなむずかしいことがわかるはずがないので、「いったい誰の受け売りをしているんだ」と聞くと、「いや、社会科の教科書にちゃんと書いてある」。そこで教科書を持つてこさせてそれを見ますと、なるほど、その社会科の教科書の国際政治のところ、「第二次大戦後の世界の、西の陣営と東の陣営の冷たい戦争は、『資本主義体制』対『社会主義体制』、体制のちがいがから起こってきたものだ」というふうに書いてある。娘はそのところを暗記して言っているわけです。それを読みましたときに、こういう教え方をしていたんでは、いずれ大変なことになるんじゃないか、と考えました。ちょうどある出版社から、高等学校の社会科の教科書を出版したので手伝ってもらいたいという依頼がありまして、引き受けたわけがあります。参考までに他の教

科書はどういうことを書いているかと思つて、教科書を全部集めて調べてみましたら、国際政治のところは「資本主義体制」対「社会主義体制」の対立である、というふうに書いてある。文部省の指導要領にそのとおり書いてあるから、他の教科書は全部そう書いてあるわけです。

私は少し考え方がちがっておりましたので、私どもの教科書では、「第二次大戦後の西の陣営と東の陣営の対立は、『自由民主主義陣営』対『共産主義陣営』の対立である」と書いて、文部省で検定があるので原稿を持っていった。文部省の係官はこれを見て、「これはダメだ。指導要領に違反しているから書き直してくれ」と、突っ返されたわけがあります。こちらも指導要領に違反しているのは百も承知のうえで意識して書いたわけですから、たぶん文部省のお役人がそう言うだろうと思いましたが、あらかじめ戦闘準備を整えておりました。当時われわれは、イギリス、あるいは西ドイツの新聞雑誌なんかを読んでおりましたので、この切り抜きをつくって、赤線を引いて持ってきました。「イギリスや西ドイツの普通の人たちが読むような新聞雑誌には、西の陣営と東の陣営の対立をイデオロギーないし体

制の対立と捉えている場合に、『資本主義』対『社会主義』なんて書いているものはひとつもない。多くは『Free World』対『Non-free World』、『自由世界』対『非自由世界』の対立と書いてある。あるいは、『Democratic Camp』対『Communist Camp』、『民主主義陣営』対『共産主義陣営』の対立と書いてある。いったい日本の文部省のお役人は、いつのまに共産圏の温床になったんだ。なるほど、ソ連・中国の新聞雑誌は『資本主義』対『社会主義』ということを書いていくけども、日本と同じ憲法をもっている西ドイツであるとかイギリスの新聞雑誌はそう言っていない。このとおりだ」と。そうしましたら、文部省の係官は、「それじゃ、おまえたちの教科書は指導要領に違反しているけれども、目をつぶって通してやる」と理解してくれました。通してくれたのはありがたいんですけども、その他にもずいぶん指導要領を無視したようなことを書いておきましたので、さっぱり売れないわけがあります（会場より笑）。教科書というのは二十万部から三十万部売れないと商売にならないんだそうでありますけども、われわれが書きました教科書はわずか一万数千部しか売れません。とつとつその出版社は、倒

産してしまいました（会場より笑）。誠に出版社に対しては申しわけないことをしたと思っております。そのせいかどうか知りませんが、諸君たちが習ってきた、現在の教科書は少し変わっているんじゃないかと思ひます。

昨年、ちよつと機会があつて、高等学校の政治経済の教科書をやはり三冊読んでみましたら、中には依然として「資本主義」対「社会主義」と書いてあるものもありましたが、「自由主義陣営」対「社会主義（共産主義）陣営」の対立と書いてあるのも若干ありましたので、現在の教科書は変わってきているんじゃないかと思ひます。指導要領が改定される以前の、今から十年ほど前の社会科学の教科書を見ますと、いずれも「資本主義」対「社会主義」と書いてありました。これは文部省だけを責めるわけにはいかないのであつて、実はその当時の新聞雑誌、朝日、毎日、読売というような大新聞が、国際政治欄のところでも西の陣営と東の陣営を取り扱う場合には、いずれも「資本主義」対「社会主義」と書いていた時代です。たとえば、ニューヨーク・タイムズなんかで「Communist Camp」と書いてあるのを、わざわざ「社会主義陣営」というふうを意識的に

「誤訳」していた時代ですから、文部省だけを責めるわけにはいかないんですけれども、そういったような、社会主義体制をみる場合に「資本主義であるか社会主義であるか」ということでは見られないような「メガネ」が、日本の知識階級のあいだにかなり一般的であったわけです。

私がなぜこういう「メガネ」を使うのに反対したかといいますと、そういうメガネは、のちに申しあげますように、十九世紀のメガネであって時代遅れであるだけでなく、その結果として、たとえば国際問題、あるいは社会問題に対する、非常に間違った見方を生みだす恐れがあるからです。と申しますのは、やはり同じように、娘が使っている歴史の参考書を読みますと、マルクスが歴史を見る場合の「メガネ」を教えているわけです。マルクスの歴史を見るメガネは、「唯物史観」です。正確にいきますと、「唯物論的歴史観」ですけど、日本人は言葉を節約していうもんだから「唯物史観」といっております。私の学生時代、昭和三、四年頃に田中義一（たなかぎいち）一八六四年～一九二九年第二六代内閣総理大臣 在任期間一九二七年～一九二九年）という陸軍大将あがりの総理大臣がおりました。いわゆる張作霖爆

殺事件（註一）を起こして天皇陛下からえらく叱られた総理大臣ですが、この総理大臣が議会で施政方針演説をしていた。演説といつても秘書官の書いた原稿を棒読みしていたにちがいないんですが、演説の中にこの言葉が出てまいりましたものですから、これを「タダモノ史観」と読んだことがあります。いかに政治家がものを知らないかということの例え話に、その当時の新聞のコラム欄なんかにはしばしば書いてありましたので、私はよく記憶しておりますけれど、「唯物史観」は決してタダモノではない、非常なクセモノの歴史観であります。

どういう意味でクセモノの歴史観であるかといいますと、歴史というのは直接目で見ることはできません。たとえば明治維新を見ようと思ってもそれを目の前で見るわけにはいきかないのであって、やはり明治維新を見る場合には一定の「メガネ」を用意してその意味を理解しなければいけない。歴史を見る場合のメガネが「歴史観」といわれるものです。そのひとつが唯物史観ですが、マルクスによりますと、真に存在しているのは物質、われわれが手で触ることのできる、目で見ることのできる物質であり、これが実在である、物質が歴史を動かしている

原動力であるというものです。物質が歴史をつくりだしているというのがいっとういうことであるかというところ、物質をつくりだす力である「生産力」が、自分の力でだんだん大きくなっていく。生産力が発展するそれぞれの段階に応じて、物質を生産するために人々が協力する組織である、経済の組織がまずできあがってくる。経済の組織が「上部構造」という名前で呼んでおられますけれども、政治の組織であるとか、宗教・道徳というふうなものも考え方が出てきます。その中で生産力が大きくなっていきまされど、ある点まで大きくなると、枠が邪魔になって伸びられなくなってくる。この枠を突き破って、生産力が伸びていく。伸びた段階においてまた新しい経済の枠ができるし、政治あるいは宗教・道徳という枠ができあがってくる。その中でさらに生産力が多くなると、さらにこれを突き破って、また新しい枠ができる。マルクスはこれを総称いたしまして「生産関係」という名前を呼んでおります。生産力と生産関係が矛盾・衝突することによって、古い生産関係が否定されて新しい生産関係が生まれてくるのである。この生産関係の移り変わりが、歴

史に他ならない。今の言葉で言い換えますと、これを「社会体制」といってよいだろうと思う。社会体制の移り変わりが、歴史に他ならないのである。

歴史を変えていく原動力は生産力、生産力が成長することによって社会が変わっていく。マルクスはこれに名前を与えた。生産力のいちばん低い段階が、「原始共産主義」あるいは「原始共同体」、その次は「古代奴隸制」、その次は「中世封建制」、その次は「近世資本主義」の時代、こういふふうになんかをつけておきます。現在、資本主義の段階にあるわけですが、この中で生産力が大きくなくなると、資本主義という枠は否定されて、「共産主義」という新しい社会体制に変わらざるをえない。ところが、共産主義の体制は二段階に分かれておりまして、完全な共産主義の社会と、それに至る過渡時代として不完全な共産主義、マルクスは「プロレタリア独裁」の時代という名前です。プロレタリア独裁の過渡時代を経て、共産主義社会ができていくのであります。のちのマルクスのお弟子さんたちの中には、この時代のことを「社会主義」の段階だという人が出てきております。したがって、このマルクスの歴史のメガネを

かけますと、資本主義社会の国は、その中で生産力が発展していくと否応なしに否定されて、社会主義体制にならざるをえないし、それが発展して共産主義体制に変わっていくのである。このメガネをかければ自動的にそういう結論が出てくる、といって差し支えないだろうと思います。

先ほどの社会科学の教科書の国際政治のところを読むと、西の陣営はいわゆる資本主義体制の国で、東の中国・ソ連は社会主義体制の国である。資本主義体制というのはやがて没落して中国・ソ連のような社会主義体制にとって代わられるのだ、という考え方が、別に論証なんかしなくても、このメガネをかけただけで自動的にそういう答えが出てくるわけです。だから、たとえば、資本主義の親玉であるアメリカと日米安保条約なんかで手を結んでいると、日本はアメリカの没落と同時に没落する。アメリカとの安保条約なんかやめてしまつて中国・ソ連と手を結んでおれば、こちらは資本主義国にとつて代わる国ですから、日本は安全である、という結論が、これも自動的に生まれてくるわけです。

さらにマルクスは、この生産力と生産関係の矛盾・衝突ということを、人間の関係で

置き換えて述べております。これがいわゆる「階級闘争」の理論、あるいは「階級闘争史観」といわれるものです。つまり、生産力を代表する人々の集団あるいは階級と、生産関係をいつまでも続けていこうとする階級との、階級的矛盾あるいは階級対立というのがある。たとえば封建社会では、農民がものをつくっている階級ですから、農民が生産力を代表する階級である。お侍、あるいは貴族が、封建社会をいつまでも続けていこうとする階級ですから、お侍と農民とのあいだで必ず闘争が起こってくる。農民一揆、農民暴動というのが起こる。それによつて封建社会が否定され、資本主義社会になった。資本主義社会では、いつまでもなく労働者がものをつくっている階級ですから、労働者が生産力を担っている階級。資本家のほうは資本主義体制をいつまでも続けていこうとする階級ですから、生産力と生産関係が矛盾する段階になると、労働者と資本家の間で否応なしに階級闘争が起こってくる。別に、資本家がずるいから、労働者が怠け者であるから闘争が起こってくるということとは関係なしに、生産力と生産関係が矛盾する段階になつてく

ると必ず階級闘争が起こってきて、しかもその結果、生産力が生産関係を突き破って進むわけですから、労働者階級は資本家階級に打ち勝って、労働者階級の力によって新しい社会主義社会がつくられる。これがマルクスの、いわゆる「階級闘争の理論」といわれる理論であります。

日本の労働組合全部ではございませんけれども、総評系（日本労働組合総評議会：旧社会党系）の組合の一部の運動方や綱領の解説なんか読みますと、「日本の労働者は労働者階級に与えられた歴史的使命を自覚して闘争に立ち上げられ」云々というふうな前文が書かれております。これは、まさにその「メガネ」をかけた人が書いているわけです。労働者階級は資本主義社会において生産力を担う階級であり、したがって資本主義社会を否定して新しい社会主義社会をつくるという役割を、歴史の法則によって与えられた階級である。つまり、人間以上の歴史法則が、人間に対して一定の役割を与える。その役割というか、使命を自覚して闘争に立ちあがれば、必ず勝てるわけでありませぬ。労働者のほうが資本家に打ち勝つ。そして労働者の力によって社会主義社会がつくられるんだ。そういうふうな考え方が、これ

も別に、理論的に、あるいは実証する必要は全然ないのであって、この「メガネ」をかければ自動的に生まれてくることによってよいと思えます。

こういったふうには、いわゆる体制側と反体制側の衝突においては、反体制側が必ず勝つんだ、体制側が必ず負けるんだ、そして資本主義社会というのが否定されて社会主義社会に変わっていくんだ、という考え方が出てくるわけですが、この「資本主義体制側」対「資本主義に反対して社会主義体制をつくる」としては、社会主義側、つまり資本主義側と社会主義側の対立は、単に一方が必ず勝つというだけではなしに、同時にこれは「善玉」と「悪玉」の対立である、という考え方も生みだしてくるわけでありませぬ。と申しますのは、マルクスの説明では、原始共産制の社会というのは、この時代においては私有財産がなかった社会、何ら自分のものという考え方がなかった時代、生産力は非常に低く、私有財産なんかは全然なかった。自分の財産というのがないので、争いの起りようがないわけです。争いというのは結局「俺が、俺が」というところから起こるわけですけども、この時代には法律もなければ裁判所もないし、お巡り

さんもいない、つまり国家というのは存在しなかった時代、争いなんかなかった時代でした。

ところが、これに続く奴隷制、封建制、資本主義の社会というのは、私有財産を基礎にした社会です。ただし、ものは有限ですから、一部の人がたくさん財産を囲いこめば、当然残りの人はものを持たない社会が出てこざるをえない。つまり、有産者階級と無産者階級という階級対立のある社会です。奴隷所有者と奴隷、封建的地主と農民、資本家と労働者。一方が金持ちになれば、他方は当然に貧乏にならざるをえない、そういう矛盾・対立のある社会。しかも財産をもっている人たちは、自分の財産を奪われないようにするために、お巡りさんを雇い、裁判所をつくり、刑務所をつくり、あるいは法律をつくった。つまり国家をつくったわけですけども、国家というのは、有産者階級が無産者階級を反抗しないように押さえつけておく道具に過ぎない、という考え方がここから生まれてくる。そういうふうな国家の見方を「階級国家観」と呼んでおります。これも国家を見る場合のひとつの「メガネ」であります。このメガネをかけますと、有産者階級が無産者階級を押さえつけておく道具が国

家にほかならない、という考え方が当然出てくるわけです。したがって、資本主義社会における国家、たとえば日本という国家は、資本家の財産を守るための手先である、あるいは資本家の犬である、という考え方がとうぜん出てくる。国家権力というのは資本家の手先である、という考え方が、このメガネをかければ当然出てくるわけでありませう。これが、一部の学生諸君でありますとか、あるいは共産主義を支持する労働者のあいだに、権力に対するアレルギーと申しますか、いわゆる国家に対するアレルギーが出てくる原因ではないかと思つて。

大学紛争のときも、大学のキャンパスのなかで民青系（日本民主青年同盟：共産党系）の学生と全共闘系（全学共闘会議）の学生がゲバ棒（学生運動で使用された武闘用の角材）で殴りあいして、たくさんケガ人が出ている。にもかかわらず、大学総長はなかなか機動隊を呼ぼうとしないわけです。うっかり機動隊なんか構内に入れますと、たちまちにして学生諸君から吊るし上げられる。この神聖な大学のキャンパスに資本家の手先である権力、機動隊を導入するとは何ごとであるか。吊るし上げられるのが怖いもんですから、大学総長はなかなか機

動隊を導入なさらない。ケガ人がたくさん出ているにもかかわらず。つまり、こういう「メガネ」が、大学のなかで一般にひろがっているからです。もっとも先生方の中には、大学が封鎖されて一週間も経ちますと、研究室にも入れない、このままにしていたのではせつかくの研究がフイになってしまう。早く封鎖が解除にならないかな、早く機動隊でも来てあの学生たちを追っ払ってくれないかな、と陰ではみんなこそそ言っているんですけども、団体交渉の席になりますと、「機動隊導入、絶対反対」、「大学立法、絶対反対」、みんなそう言うわけです。これは、大学の中でそういう「メガネ」が通用しているために、そついわざるをえない、といつてよいだらうと思ひます。

マルクスによりますと、私有財産のある社会は資本主義社会で終わりであつて、共産主義社会になれば私有財産はなくなつてくる。この社会主義と、不完全な共産主義と、完全な共産主義のちがいがどこにあるかというところ、マルクスの説明では、不完全な共産主義社会においては、「各人は能力に応じて働き、労働に応じて報酬を受ける社会である」といつぶに述べております。この社会において、資本家はいません。しかし、

労働者の中でもたくさん労働した人はたくさん収入があるし、少ししか働かない人は収入が少くない、それだけまだ貧富の差がある。その意味で完全に平等な社会ではない。ところが、共産主義社会になると、「各人は能力に応じて働き、必要に応じて与えられる社会である」、そういうふうにはマルクスは言っています。つまり、必要なものはいつでも与えられるわけでありませう。電気洗濯機が必要になった、はいどうぞ。自動車が必要になった、はいどうぞ。いつでも社会から与えられるので、あらかじめ「これは俺の電気洗濯機である」、「俺の自動車である」と、自分で名前をつけて貯めこんでおく必要はないわけです。自分の財産をもつ必要がなければ、争いの起こりようもなくなるわけですが、争いの起こりようもなくなるわけです。したがって、マルクスの説明によりますと、共産主義社会になれば国家はおのずからしてなくなつてしまふということになる。争いがなくなるわけですから、法律も必要なくなれば、裁判所も必要なくなる。お巡りさんもみんな失業してしまふし、刑務所は開店休業、ガラ空きだ。税金ももちろん払ふ必要はないわけでありませう。いわば理想社会、完全な社会ができあがっ

たわけです。それに対して、資本主義社会は矛盾・対立のある社会です。したがって、「資本主義」対「社会主義」の対立ということとは、一方は矛盾のある「最後の社会」であり、他方は完全な社会に行く一歩手前の段階でありますから、一方はまちがった社会、もう一方は正しい社会、つまり、「悪い社会」と「よい社会」との対立である。あるいは、資本主義社会を倒そうという反体制の運動というのは、悪い最後の社会を倒す運動であるから、いわば正義の闘争である。つまり、「善玉」と「悪玉」の対立ということになってくる。ちなみに、これにレーニン（註三）の「メガネ」をもう一枚ダブらせてかけますと、資本主義社会が高度化していった、その中で生産力がだんだん伸びていくと、それ以上国内において労働者を搾取することができなくなってくるので、外国に資本を輸出して、外国に工場なんかを輸出して、その権益を奪われないようにするために軍艦や軍隊を派遣する。植民地としてそこを支配しておく。つまり、帝国主義政策をとらざるをえなくなってくる。資本主義が高度化してくると、必ず帝国主義政策をとらざるをえなくなってくるのである。ひとつの国がそうすれば、他の国もそうするわけですから、帝国

主義と帝国主義の衝突、いわゆる帝国主義戦争が必ず起こってくる。つまり資本主義の高度に発展した段階は、必ず帝国主義であって、戦争が必ず起こる勢力である。それに対して、社会主義のほうはそういう矛盾のない国でありますから、外国に資本を輸出する必要なんか全然ないわけであって、したがって一方は戦争を常にはらんでいる国、他方は戦争の原因のない国、「戦争勢力」対「平和勢力」の対立、ということにもなってくるだろうと思います。

したがって、このメガネをかけて先ほどの社会科学の教科書の国際政治欄のところを読みますと、アメリカ、イギリスという西の陣営は資本主義であり帝国主義陣営、それに対して中国・ソ連というのは社会主義陣営でありますから、いわゆる西の陣営と東の陣営の冷たい戦争というのは、「悪玉」対「善玉」の対立である。悪玉を応援するとは何ごとであるか。あるいはアメリカの大統領が日本に来る、フォード大統領（ジェラルド・フォード 一九一三年～二〇〇六年、第三八代大統領 在任期間一九七四年～一九七七年）が日本に来るともなれば、彼は「悪玉のボス」ですから、それを歓迎するとは何ごとであるか、「フォード大統領訪日、

絶対反対」というスローガンがとうぜん出てくるわけあります。もつとも、そういうことを言っている人も本当に反対しているかどうかは別問題ですけども、スローガンとしては「フォード大統領訪日、絶対反対」。「悪玉の親分」を歓迎するなんてとんでもない。あるいは、アメリカとソ連とが、同じように核兵器、原子爆弾の実験をいたしましても、アメリカがやったときは「帝国主義戦争準備のための実験をやっているんだ、平和を守る立場から絶対反対しなければならぬ」というので、たちまちにしてデモ隊を組織してアメリカ大使館を取り巻いてしまふ。しかし、今まで中国なりソ連なりが何回か核兵器の実験をいたしましたけども、かつて中国・ソ連の大使館がデモに取り巻かれたという話は聞いたことがない。これはやはり、そういったデモをやっている人たちがこういう「メガネ」をかけている人が多いもんですから、中国・ソ連のほうは「平和勢力」であるから、仮に核兵器の実験をしても、「それは平和を守るための核兵器の実験なんだ、したがって反対するわけにいかない」。アメリカのほうは「戦争のための核兵器の実験であるから、これは反対しなければいけないんだ」。まるで、その原子爆弾

の灰が、アメリカのほうから吹いてきた場合には死の灰を撒き散らすけれども、反対側から吹いてきたときには平和の灰を撒き散らすかのように。われわれの常識から考えますとまことにおかしい考え方なんですけれども、この「メガネ」をかければそういったふうな考え方が当然に出てくると思ってよいだろうと思います。

こういったふうなメガネをかけたまま、国内の社会問題を見るとどうなるのか。たとえば今から五、六年ほど前、「新宿騒乱事件」(一九六八年)という、学生のデモ隊と機動隊とが衝突する、双方にかなり負傷者が出る、というふうな事件が起こりました。そのときお巡りさんが負傷しても、新聞の下のほうにちよっとしか出ないわけであります。しかし、学生のほうがケガでもすると、第一面に「国家権力の横暴である」というような大見出しでデカデカと出るわけがあります。われわれの常識からしますと、片一方は公務を執行していて負傷した、もう片一方は公務を妨害していて負傷しただけです。普通からいえば公務を守っている人の負傷のほうを大きく取り扱うべきではないかと思えますけども、どうも日本の新聞を見ていると取り扱いが逆である。こ

れはやはり、新聞を取材している人のなかにこういう「メガネ」をかけている人がいるわけです。反体制運動をやっている学生のほうは「善玉」で、権力のほうは、資本家、体制側の犬であるから、これは「悪玉」なんだ、これはケガして当たり前なんだ。「善玉」の学生を傷つけるとは何ごとであるか。そういうふうな意識があるからではないかと思えますが、常に新聞記事の書き方が学生サイドのほうから書かれている。これはやはり、こういうふうな「メガネ」が、暗々のうちに日本の新聞記者なんかの間にかなりひろがっているからではないかと考えられるわけであります。

こういうメガネをかけて極端な行動に出た例が、わたくしはあの岡本公三(註四)の例ではないかと思うんですけれども、岡本公三がテルアビブでプエルトリコ人を含む二十数人を殺しまして(註五)テルアビブ空港乱射事件 一九七二年)、イスラエルの法廷で裁判を受けた。その裁判の陳述書の要旨が日本の新聞でも紹介されましたけれども、あれを読むと岡本公三がこういうふうなことを述べているわけがあります。「われわれの世界革命運動というのは、現在は少数であり、ごくひと握りの人数であるけ

れども、必ず勝つんだ」という必勝の信念を披瀝しております。さらに、「われわれの世界革命運動というのは、矛盾のない平和な世界秩序をつくることとする運動であるから、正義の戦いなんだ。正しい社会をつくることとして戦いなんだ。正しい社会をつくることとする運動に反対する人はもちろんであるけれども、それに協力しない人たちは、つまり『よいこと』に協力しない人たちは悪人であるから、それを殺しても差し支えないんだ。プエルトリコ人を殺したのも、そういう考え方によるんだ」ということを法廷で述べておりました。これなんかまさに、こういうメガネをかけていた場合の考え方です。反体制運動は必ず体制側に勝利をする。のみでなしに、「正しい社会」をつくることとする運動であるから、それは「正しい」闘争である。それに対して協力しない人たちは「悪人」である、という考え方が当然出てくる。それを殺すか殺さないかということは別問題でありますけども、われわれの運動に協力しない者は悪人なんだ、だから殺されても仕方がないんだ、というふうな考え方が出てくるだろうと思えます。まあ岡本公三の場合は、多少精神不安定というふうな要素があつたように思うんですけども、

しかし、「こういつふうな「メガネ」がかなり現在の日本の学生運動の指導者の中には一般的に入っているように思います。

かれこれ八年ほど前になりますが、第一次羽田事件（一九六七年）というのがありました。そのときの佐藤総理大臣（佐藤栄作）さとうえいさく（一九〇一年）一九七五年第六一、六二、六三代内閣総理大臣）が東南アジア親善旅行に羽田から出発する。それを阻止するために、学生がゲバ棒を持って羽田空港に集結したわけでありました。ゲバ棒、その当時はまだ角材と称していましたけれど、学生が角材をもって街頭に進出したのはこれが初めてのことです。それを排除しようとしたところの機動隊と衝突して、双方かなり負傷者が出た事件であります。テレビが執拗に報道しましたから、あなたたちの中にも見ておられる方があるかもしれない。その衝突の直後に、ある民放、ちよつとその放送局の名前は忘れましてけども、あるテレビ局が、学生運動の指導者にインタビューを試みておりました。放送記者がマイクを突きつけます。相手は覆面しておりましたけれども、「いったいあなたたちはなんで角材を振るって機動隊なんかと衝突をするんですか」と訊きましたら、

「現在の日本は資本主義社会であり、資本主義社会において労働者は搾取されるから、労働者は必ず反体制の闘争に立ちあがるべきはずなんだ。ところが日本はこの数年来、景気がよいもんだから、労働者の賃金も毎年上がっちゃって、労働者は反体制の闘争に立ち上がるといふ歴史的使命をすっかり忘れちゃって、マイホーム・マイカーの夢に眠りこけている。この労働者の眠りを覚ます起爆剤として、われわれは機動隊と衝突しているんだ」ということをこの学生運動の指導者は答えておりました。放送記者が念を押して、「それじゃ、あなたがたの目的は日本に革命を起こすことなんですか」と言いましたら、「その通りだ」と答えております。さらに放送記者が語を継いで、「仮にあなたたちのいうように日本に革命が成功したと仮定して、あなたたちは、この複雑な日本の社会を、その後いつたいどういう経済の組織、どういふ政治の組織でやってくつもりですか」ということを訊きましたら、その学生運動の指導者が答えるには、「われわれの任務は現在を粉碎することにあるんであって、現在を粉碎してしまえば、あとは何ら矛盾のない社会が来るに決まっているから、政治の組織をどうする、経

済の組織をどうするなんて考える必要はないんだ」と。まさにこのメガネをかけた者として百点満点の答えをしている。つまり、現在を粉碎してしまえば、あとは矛盾のない共産主義社会が来るに決まっているわけであります。

共産主義社会においては必要に応じて何でも与えられるわけですから、経済の必要が全然なくなっている社会であります。経済というのは、物が足りないから節約することが経済のはじまりなんですけれども、必要に応じて何でも与えられるのであれば、経済の必要は全然ない。そういう社会において、「経済の組織をどうしますか」と訊くほうがよっぽど頭がおかしいわけであります。その社会になれば矛盾がなくなっているわけですから、国家がなくなっている社会。国家がなくなっている社会において、「政治の組織をどうしますか」と訊くほうの頭がよっぽどおかしいわけであって、このメガネをかけた限りにおいてその学生の答案というのは百点満点つけてもよいと思つて私は感心してテレビを聞いていたことがあるんです。そういったふうなメガネをかけている人が、一般の学生運動の指導者、あるいは一部の新聞記者なんかの中にも、少

なくないんではないかと思う。

私は、こつこつふうなメガネというのは、これは一種の宗教的な歴史観であり、あるいは社会観と違ってよいのではないかと思えます。ヨーロッパはキリスト教の国でありますけれど、キリスト教の中でも細かな流派がありまして、聖書の解釈はそれぞれ違っておりますけども、ここでは細かなことを省略いたしますので、ごく大雑把にお聞かせ申し上げますけども、キリスト教の歴史観とこのマルクスの歴史観を比較してみますと、非常に似た点があるわけです。キリスト教の歴史観は、ただひとつの神しか認めません。キリスト教に限らず、ユダヤ教にしましても回教(イスラム教)にいたしましても、ジェルサレム(エルサレム)に聖地をもつ宗教というのは、いずれも一神教、ただひとつの神しか認めません。そこから宗教戦争が起こってくる。キリスト教はユダヤ教徒を敵視するし、あるいは回教徒とユダヤ教徒はお互いにならみあっている、戦争している。最近でもしばしば戦争している。何の罪もない日本にまで「油を売らない」なんて言われてとばかりを受けて四苦八苦しているんですけども、そういつた宗教戦争が生まれてくる。これはいずれもひとつ

の神を信じているわけでありまして。日本の場合は、古来の神道の考え方はいわゆる多神教であって、一神教ではない。日本の場合は、たとえば川には川の神様がいて、海には海の神様がいて、私のうちには「山の神」なんておつかない神様もおりますけども(笑)、それぞれの神様の守備範囲が決まっておりますから、神々の平和共存ができるんで、宗教戦争が起こらないんですけれど、一神教の場合においてはしばしば宗教戦争が起こる。

キリスト教の場合も一神教でありまして、ひとりの神が、光と闇に始まるあらゆる森羅万象を、すべて自分の統一的な意思でおつくりになったということになっているわけでありまして。いろいろなものをつくりだした後の六日目に、人間をお創りになる。最初にアダムをお創りになり、それからイブをお創りになった。アダムとイブが生活したのは、エデンの園という、いわば極楽のようなところであって、働く必要なんて全然ない。お腹が空いてきたら手を伸ばせばいたるところに果物があるんで、それを食べていけばよい。働くことはない、自分の好き勝手なことをやってよい。いわばパラダイス、極楽であります。神様はアダムとイブに対して、

「おまえたちはここで何をしてもよいけれども、ただひとつだけしていかんことがある。それは、ここに生えている、このリンゴの実だけは食べてはいけないんだ」ということを、かたく言いつけておいたんであります。アダムとイブは神様の言いつけを守ってそれを食べないようにしていたんですけども、ある日、悪魔が化けたところの蛇が現れてきました、アダムとイブをさかんに誘惑する。「あなたたちは言われたとおりそれを食べないようになっているけど、本当はおいしいんだ。食べなさい食べなさい」。あんまり誘惑するもんですから、とうとうイブがその誘惑に負けてリンゴを食べたわけでありまして。そのイブが「あなたも食べなさい」とアダムに言うものだから、アダムもとうとうつられて食べた。それ以来、女のほうは誘惑にもりいということになっているらしいんです。それは冗談ですけども、つまり、神様から禁じられたところの禁断の木の実を食べたわけでありまして。それがわかったもんですから、神様は大変怒っちゃって、「おまえたち、今まで何ひとつ不自由ない生活をさせたのに、俺との約束を破って禁断の木の実を食べた。その罰として、このエデンの園から出ていけ」と、突き落とされてき

たわけであります。それ以来、アダムとイブ、およびその子孫であるわれわれ人間というのは、額に汗して一生懸命働かなければおまんまを食べることはできない。一生懸命に働いても、まじめに働いている人が非常に貧しいのに、「土地転がし」なんかやって金儲けたような人が総理大臣になんかなっている（会場より笑）。そういう矛盾した社会に住まざるをえなくなってきた。まじめな人は毎日毎日涙を流さなくてはならない、涙、涙の生活をしなければならぬ。しかし、これは神様との約束を破るという大きな罪を犯した当然の罰ですから、どうにも仕方ないわけでありませぬ。我慢しなくにはしょうがない。

神様は、一方においては正義の神ですけれども、他方において慈愛の神ですから、いちど突き落とした人間を再び天国に連れ戻すために、神の子であるイエス・キリストをこの世に遣わした。そのイエス・キリストが、人類全体の罪を償うために磔の刑に処せられたわけですから、イエス・キリストを信じている者は再び天国に連れ戻される。つまり、この世の最後の日がきまして、最近では日本でも終末観とか何とかいわれますけれども、いわゆるこの世の終わりが来て、その

日に「最後の審判」というのがある。人間をすべて集めて、神様を信じていた者には「おまえ天国に入れ」、「おまえは神様のいうことを聞かずに、講義中居眠りばかりしていたから地獄に落ちておしまい」（会場より笑い）、永遠の地獄に突き落とされていくわけでありませぬ。つまり、キリスト教の歴史の見方では、エデンの園から涙の谷（註六）に突き落とされ、最後の審判によって、イエス・キリストを信じる者は再び天国に連れ戻され、信じなかつた者は永遠の地獄に落ちていく、というふうな、人間の運命はあらかじめ決められている、というふうな見方をしているわけでありませぬ。

マルクスの見方をこれに比較しますと、マルクスは唯物論ですから、もちろん天国であるとかエデンの園だとかいう言葉は使っておりませぬけれども、原始共産主義の何ら矛盾のない社会に始まり、矛盾のある私有財産の社会を否定し、プロレタリア独裁を経て、再び共産主義社会という矛盾のない社会に入ってくる。歴史的使命を自覚して反体制の運動に従っていた者は、革命の結果、共産主義社会に入るけれども、いつまでも資本主義を支持していた者は没落して永遠の地獄に落ちていくのである。そう

いうふうな構造をもっている点においては、一種の「宗教的な」歴史観と違ってよいと思えます。マルクスはこれを「科学的な」歴史観であるといっておりますけれども、科学が将来社会を無条件に予言する強い力をもっていると考えたら、これはとんでもない間違いであつて、将来社会を無条件に予言することができるとは、学者ではなしに易者です。本当に学問をした人であるならば、こういう条件のもとにおいて、こういう現象が起これば、こういう結果が起こるといふことは言いつるわけですが、無条件に、将来社会はこういうふうになる、なんていふのは科学的な見方ではないわけでありませぬ。つまりヨーロッパでは、キリスト教の国であるから当然といえば当然ですけども、キリスト教的な歴史観というのが非常に強く一般の民衆の中に入っているわけですね。マルクスは唯物論を唱えて、「宗教は民衆のアヘンである」といふふうにいっておりますけれども、その発想法においては、ユダヤ教・キリスト教的な考え方から免れることはできていないといつてよいだらうと思ひます。私は決して宗教を否定するわけではない。科学の及びえない領域といふのはいろいろあるわけですから、そ

の領域について宗教が機能するというのは大いに歓迎すべきことだと思えますけれども、「宗教」に過ぎない見方が、「科学」の装いのもとに政治の領域、経済の領域なんかに入ってくると、これはとんでもない間違いを犯すことになるわけであります。こういうふうな見方が、最近では薄れてきたことは事実でございますけれども、今から四、五年前までの日本にはかなり一般的に広がっていたように思います。それでは、それに代わる、歴史を見る場合の「メガネ」というのは、どういふメガネを使ったならば、比較的程度の狂いのない見方ができるか、ということが次の問題でございます。

経済の運営の仕方に、自由経済というのと計画経済というのがあります。自由経済というのは、決して何をやってもいいという意味の自由ではありません。価格というのが、自由な市場において「需要」である買い手と、「供給」である売り手との関係で決まります。売り手である生産者は、互いに競争していますから、いいものを安くつくろうと努力します。つまり「質」を求める経済です。これに対して、ソ連が行っているのが計画経済ですが、決して無駄のない計画されたものではありません。競争原理に基づ

く質とは関係なしに、「量」の経済であります。たとえば、おまえの工場は鉄を何トン生産する。そのために必要な原料をこれこれ配給するし、労働者をこれだけ配当する。すると、一人ひとりの労働者のノルマが決まってきた、これこれのノルマを果たせば、一日にお米を三合、シャツを一年に三着、靴を一年に二足、というふうな物で配給する。量の経済であります。科学とは関係ない、量の経済。昔、日本の軍隊では「員数主義」という言葉があつて、点呼なんかのときに靴下が一足たりない、さあ大変だ、隣の班でも何でもよいから行ってかっぱらってきた、とにかく数だけを合わせよう、これを員数主義といつておりましたけれども、こちらのほうはつまり員数主義の経済、量が非常に重要になってくる。縦軸に「独裁政治」か「民主政治」かという政治の軸をとりまして、横軸に「質の経済」か「量の経済」という経済の軸をとります。社会が二次元の世界においてどこに位置するかというふうな捉え方をするとさまざまな社会の特徴を正確に捉えることができます。

こういう捉え方をしますと、十九世紀のイギリス社会というのは、自由経済に非常に近く、議会はあつたけれども選挙権を

もっているのはごく少数の限られた人で独裁政治に近い。そこからスタートして、その後、選挙権がだんだん拡大されてくる、労働組合がだんだん公認されてくる、つまり民主政治のほうになるにしたがつて、経済的にはどういう方向に変わってきたかといいますと、だんだん労働法なんかを取り入れる、物価の統制はやる、公共料金の統制はやる、社会保険の法律をつくる、というふうにして、民主政治で質の経済という方向に変わってきたております。日本の近代化も、イギリスからだいたい百年ぐらい遅れてスタートしましたけれども、方向としましてはだいたい同じであります。明治十年ぐらいからスタートしたとみてよいんですけれども、だいたいイギリスと同じところからスタートして、同じ方向に発展している。日本の場合は戦争なんかありましたから紆余曲折はひどいんですけども、大きくいうとだいたいは政治の軸では民主政治へ、経済の軸では質の経済という方向に発展してきております。ソ連はこういう近代化をやつたかという、ロシアも革命以前の帝政時代においては、ちよつと日本と同じように、ほぼ同じ時期に、ちよつと独裁的な政治から近代化を始めたわけであります。日本の場合は近

代化をスタートした直後に、幸いにして日清戦争に勝ち、日露戦争に勝ち、第一次大戦に勝ちましたために、この近代化が非常にスムーズに進んだ。ところがロシアの場合には、日露戦争で負ける、第一次大戦では木っ端微塵にやつつけられてしまふ。というので、民主化と質の経済に向けて昇りかけたのが、戦争の結果、墜落してしまつたわけがあります。

よく社会の近代化の過程というのは、飛行機の離陸に例えられるんですけども、飛行機の事故がどういふときにいちばん多いかというところ、離陸直後に墜落するケースがいちばん多いわけです。つまり、滑走してまいりまして、上空に離陸していく。ある程度上空に達してしまえば、それから先は安定します。離陸から上空に達する、この離陸の段階がいちばん墜落の危険が多いので、「シート・ベルトを締めなさい」という機内放送も出るわけですけども、この段階がいちばん墜落の危険性がある。社会の発展も似たところがある。農業社会というのはほとんど生産性が変わらない、平行した社会であります。完全な工業社会になつてくると、それから先は自動的に成長を続けていくことができる。農業社会から工業社会に

変わる過渡時代というのが、いちばん墜落の危険が高いときです。飛行機と同じように、エンジンに無理がかかる。ロシアはまさにこの離陸の時代において戦争に負けちゃつた。ただでさえ危ないのが戦争に負けたので、墜落しちゃつたわけです。レーニンは、ここから近代化を再スタートしたわけでありす。完全な共産党の独裁体制、完全なソルマの経済、ここから近代化をスタートした。

その後、近代化に成功するにしたがつて、だんだん自由経済的な要素を取り入れております。つまり労働者も、物で賃金をもらうんでなしに、金で賃金をもらうようになってきている。あるいは、労働者も職業を変わることができるようになってきている。こちらの仕事は賃金は安いけども仕事は軽い、こちらは賃金は高いけども仕事はきつい、どっちを選ぶか。選ぶことができるようになってきた。だんだん自由経済に近づいてきている。フルシチョフ(註七)の時代になりますと、各企業は利潤を追求するということまで言うようになってきております。国营企業ではあるけれども、各企業は利潤を追求する。これも経済理論として説明できますけれども、説明していますと時間が

ありませんから、結論だけをいいますけれども、だんだん自由経済に近づいてきているわけでありす。つまり経済的には、今日、高度工業国家に関する限りは、完全な資本主義社会もないし、完全な社会主義社会もない。いわゆる混合経済体制。計画と自由とをかみ合わせていく。それぞれの長所をかみあわせていくという、いわゆる混合経済体制になつて、両方がだんだん接近してきます。依然として残っている違いは、政治体制であります。たとえばチエコスロバキアの動乱(註八)、一九六八年にソ連の戦車が入ってきて、チエコの改革を押しつぶした事件がありました。チエコの人たちが経済の自由化をはじめた段階においては、ソ連は何ら干渉しませんでした。自分の国でも経済の自由化をやっているわけですから、おまえの国ではやつちやいかんとはいえないわけであつて、ぜんぜん干渉しなかつたわけでありす。チエコの人たちは安心して、ソ連は何ら干渉しないから大丈夫だといふので、経済的に自由化するだけでなく、政治的に民主化しようとした。政府を批判する新聞を出すとか、共産党以外の政党をつくらうとか、こちらのほうに移行したもんだから、ソ連はあわてた。これを見過ごし

ていたんでは、チェコの共産主義体制は壊れてしまふ。今のうちに壊さなければ、やがてポーランドに波及するし、ソ連にも波及するといふので、戦車で潰してしまつた。その点からいいますと、今日の違いは、むしろ政治体制の対立のほうが目立つ。経済体制の対立もまだ残つておりませうけれども、むしろ政治体制の違いのほうで、現在の国際政治を見る場合には重要な対立ではないかと思ふ。それで、私たちが教科書を書いたときに、西の陣営と東の陣営の対立は、「資本主義」対「社会主義」の対立とみるよりも、「自由民主主義体制」対「共産主義体制」の対立とみたほうが、より正確に理解することができるという考えたわけです。

こつこつこつこつなものを考えるときの見方で大切なのは、多面的に考えることです。ある時代においては経済的な対立が大事だけでも、またある時代においては政治的な対立が大事である。二十世紀になつてくると、あるいは三次元の世界として、文化的な対立といふふうなものを考慮する必要が出てくるかもしれない。多面的に見ていくといふ見方をするのでないと、何か一元的な、ひとつの見方に固執していたんでは、社会体制をとらえる場合にも正確に捉えることが

できなくなつてくると思ひます。

第二次大戦後、三十年経ちましたけれども、現在までの日本は非常に恵まれた国際政治の条件のもとにありましたので、現実には合わない見方をしています。まだまだ何とかやってこられたと思つていいけれども、今後は、そんな恵まれた条件というのはだんだん消滅しつつあると思ふ。今までは、アメリカは絶対日本を手放せないんだと、安心して「ヤンキー」「ゴホーム」なんていつていましたけれども、今度はヤンキー「ゴホーム」なんていわなくても、アメリカのほうから「ハイさようなら」と出ていくかもしれない。そういうときに日本の安全を守り、日本の繁栄を築くのは、やはりわれわれ日本人の力である。われわれの手で日本の国の安全を守り、繁栄を築いていくためには、やはり二十世紀に合ったような「メガネ」をかけて、社会問題を理解していくのでなければ、やがて日本はほんとうに取り残されていく。あるいは、下手すると日本はほんとうに沈没してしまふ。といふことにならない保証は、少しもないんじゃないかと私は思ふ。

そうならないためには、やはり、できるだけ社会問題を正確な「メガネ」で見ることで

あります。まったく曇りのないメガネ、まったく正確なメガネなんていうのは人間のつくるメガネでありますから、あるはずはないんですけども、比較的、度の狂いの少ない、時代に合ったようなメガネをかけて社会問題を見ることが、私は必要じゃないかといふことを考えておりました。きょう皆さんにそのような私の平素考えていますことをお話しした次第であります。

どうもありがとございました。(拍手)

註一 マルクス (Karl Marx) 一八一八年～一八八三年) ドイツの経済学者・思想家・革命家。エンゲルスとともに科学的社会主義を主張し、共産主義運動に大きな影響を与えた。著書「共産党宣言」「資本論」、他。

註二 張作霖爆殺事件 一九二八年 中国北部、奉天軍閥の総帥である張作霖(ちよさくりん)が、日本の関東軍による列車爆破で死亡した事件。

註三 レーニン (Vladimir Il'ich Lenin) 一八七〇年～一九二四年) ロシア革命の指導者、一九一七年、十月革命(ボルシェビキ革命)を成功させ、史上初の共産主義政権を樹立し、人民委員会議長としてソビエト

連邦を建設するとともに、国際共産主義運動を指導した。

註四、註五 岡本公三、テルアビブ空港乱射事件 一九七二年、イスラエルのテルアビブのロッド国際空港において、テロ組織である日本赤軍が銃を乱射し、多くの犠牲者が出た事件。犠牲者の多くは民間人で、巡礼目的のプエルトリコ人も含まれていた。

註六 涙の谷 旧約聖書・詩篇中の言葉。特定の地名を指すのではなく、荒廃と嘆きのある場所の意。

註七 フルシチョフ (Nikita Sergeevich Khrushchov 一八九四年～一九七一年) スターリンの死後、第一書記となり、スターリン時代の粛清を糾弾する「スターリン批判」を行い、アメリカとの平和共存外交・党内民主化を進めたが、一九六四年失脚した。

註八 チェコスロバキアの動乱(プラハの春・チェコ事件) チェコスロバキアで一九六八年の春から夏にかけて、ドプチェク党第一書記により自由化政策がとられた(プラハの春)。しかし八月に、ソ連・東欧軍の介入により弾圧された(チェコ事件)。

本文中に、現在では不適切と思われる表現が用いられている場合がございますが、講演時の時代背景等を尊重し、当時のままといたしました。